

(生き辛さのカケラ) (ポエム 宮原貴子)

誰に話す事もなく、無言の私に自分の気持ちを表す為には、涙の代わりに書き続けた歌は誰の心に届くんだろう。自分の道なのに、色々な呪博が私の感情をふみにじる。時にはそれが私の心を追い詰めて、命の危機さえかえりみず、自分の孤独や存在を色々な形で表している。だとしたらこの時代、生きていく為に私が長年苦しんだ多数の当たり前前の事とされてきた置き去りにされてきた少数派の魂が、いつしか、生かされる様、これからも、私は、色々な生き方を変わりゆく時代を見届けながら言葉にならない叫びを生き方を見つめてこの世に表現していこうと思ふ